住みたくなる漁村づくりを目指して

西津漁協婦人部
部長　村古紀美

1．地域と漁業の概要

私達が住む小浜市西津地区は、福井県若狭湾のほぼ中央に位置した波静かな小浜湾東部に面したところにある。

小浜市は、古くより天然の良港として栄え、京都、奈良の海の玄関として、又、大陸文化の受け入れ港として発展し、市内には神社、仏閣が数多くあり、国宝・重要文化財なども豊富で、「海のある奈良」と呼ばれ、古くより若狭地方の文化、政治、経済の中心となっている。夏は、これら文化財の「国宝めぐり」、或いは日本海の荒波によってできた「蘇洞門」の観光や海水浴などで大変にぎわう。

私達の漁村は、小型底曳網漁業を始め、定置、採介藻、一本釣、延縄、カキの養殖漁業を行っている。

2．婦人部の組織と運営

私達の婦人部は、昭和32年に結成され、40年になるが、その間婦人部活動にも盛衰があったが、現在部員数29名で、主な活動は①魚食普及の推進、②体験漁業の実施、③環境保全、環境美化（ア．合成洗剤追放運動、イ．アクリルタワシの活用、ウ．漁港、地域の清掃、エ．花壇づくり）、である。

3．活動課題選定の動機

私達のグループは、少人数の婦人部であるためか、思いついたことは即行動に移せるという一致団結心が強くもあり、また、漁業の町として栄えるためには、女性の持つ役割が大きいことを全員自覚している。

グループのモットーは、「住みたくなる漁村づくり」で、女性の手で地域の活性化をはかるには何をなすべきか、何ができるか、を絶えず模索している。そんな折、近年の漁業後継者不足に鑑み、地域の担い手として、漁業士をはじめ青壮年や婦人の果たす役割が増大しており、自主的地域活性化活動を促進することにより漁村の活性化を図ることを目的とした平成８年度の「いきいきライフアップ事業」、９年度の「水産地域担い手グループ対策事業」の助成事業を知り、私達婦人部は一気に活気づき、この事業を申し出、活動の輪が広がった。

4．実践活動状況及びその成果

（１）漁業体験学習活動に取り組んで

福井県は、漁業経営体数、漁業就業者数ともに減少率は全国平均より少ないものの、減少傾向が続いている。また、平成７年の男性の漁業就業者数の年齢構成をみると、60歳以上が43%を占めているなど、他県と同様高齢化が進んでいる。

ある時、福井市漁協婦人部が、古い慣習にとらわれ地域に活気が見られないので、地域の活性化を目的に、地区の小学校児童に、ふるさと鷹巣に愛着を感じているかどうか聞いてみようと「聞いて頂戴私達の夢を、ふるさと鷹巣にこんな宝が欲しい－僕の夢、私の夢」と題したアンケート調査の結果を見せてもらった。「私は鷹巣にあう水族館が欲しい。海があるし、魚がたくさんいれば楽しいからです」、「学校が海の中にあるといいです」、「鷹巣を根拠地とした豪華客船を走らせてほしいです」などと書かれたのを見て、次代を担う子供達が、ふるさとをこよなく愛し、海にあこがれを抱き、大きな夢と希望を持っていることを知り、改めて婦人部の果たす役割の大きさ、大切さを痛感した。

そこで、漁業、漁村に興味、関心を持っている地区の子供達に実際に体験を試み、さらに魚や漁業に興味を深め、海を、漁村を好きになってもらう事がまず必要であること、そして後継者が育ってくれることを願い体験漁業を私達の手で実施することにした。

体験漁業を実施するにあたり、「実施時期・場所・内容の決定」、「子供達の募集方法」、「船の準備」等について協議をした。実施時期については、凪の日も多く、しかも子供達が夏休みに入る７月に決め、場所は安全面を考慮して湾内とし、内容については、初心者が取り組みやすいキス釣りとした。参加募集については、青少年の育成に携わっている公民館に相談に行き、私達の希望である５・６年生を対象に募集してもらうことにした。

船の手配については、救命胴衣など完全装備している船とした。特に心配したのは、安全面であった。これは、乗船前に注意事項を話すことや、海上では私達が子供達から目を離さず、細心の注意を払うことであった。乗船定員の都合上、参加できたのは12名で、うち２名が女子であった。

私達は、後継者育成という意味においても、男子の参加を望んでいたのが本音であったが、公民館の方の話では、今は野球でも女子がプレーする時代であるということから、これも時代の流れなのかと感じた。そして、女の子が漁業について理解してくれるということは、漁村の嫁不足の解消となる可能性が含まれていると思ったら、女の子の参加がとても明るい兆しを見たような気がした。とにかく準備万端で、後は実施日を待つばかりとなった。ところが例年より早い台風の到来などにより延期すること３回。４回目の８月11日にようやく願いが叶った。

当日は、朝から夏の暑い陽射しの中、待ちに待った船での体験漁業ということで、午前７時の出航予定を待ちきれずに子供達は７時前に全員集合である。婦人部役員より体験漁業への参加お礼を述べ、保護者代表より「よろしくお願いします」と挨拶のあと、婦人部員が諸注意、日程を説明し乗船した。

船は小型底曳船の14トンで、底曳専用の機器類や、パソコンで漁獲量が管理できるシステムや魚群探知機等の説明で、近くで始めてみる子供達の目はキラキラと輝き、大変興味深かったようである。子供達の乗船を確認し、見送りの父兄や関係者が見守る中、船のもやい綱を放し、ゆっくりと岸壁を離れた。子供達が精一杯手を振る様子は、探検心と希望に溢れていた。

漁場は湾内だったので20分程で着き、子供達は待ってましたとばかりに釣りを始めたが、慣れない手つきで探りながら、真剣そのもので挑戦していた。魚が釣れる度に喚声とガッツポーズが出てきたり、余裕が出てきたのか魚の名前や特徴について興味を示し始め、漁師さんとの話もはずんだ。飽きる子、具合を悪くする子が出ないかとの心配をよそに、終了時間を告げた時は、本当に残念そうで渋々道具を片付けていた。

その後、近くの海水浴場で海水浴を楽しんだ後、先程釣り上げた魚を、婦人部員による魚の捌き方指導で作った刺身を子供達は大喜びで「特別美味しい」と満足そうに顔をほころばせていたのがとても印象的であった。

帰りの船の中でアンケートを書いてもらい、感想などを発表しあった。「また、この様な体験漁業をしてほしい」、「漁師になりたい」といったとても嬉しい発言が聞かれた。

心配しながら、初めて実施した漁業体験は、子供と一体となって無事成功につなげ、後継者育成の一端を担うことができたであろうことを確信し、私達婦人部の喜びは、言葉で表現できない程の大きな宝物となった。と同時に、婦人部一同次回の体験学習の実施を脳裏で計画していた。

生産の場、生活の場あるいは後継者育成の場ともなる大切なこの碧い海が、一年前の重油流出事故では、一夜にして黒い海と化し漁業者・地区住民７万４千人、ボランティア９万人という多くの方々の油回収作業により、福井の海はきれいに蘇った。

ボランティアに参加した方は、若い人が多かった。また、福井へ何回も訪れたことのある人が、我が事のように寒い中で油を回収していた。釣り客で漁港を汚す人もあれば、こんなに自然を大切に思い、ボランティアで来てくれる人がいるのを目の当たりにし、毎日が感動の日々であった。見知らぬ多くの人々が、我がふるさとのように福井の海を、自然をこんなにも大切にしてくれる、そんな漁村に私達は改めて愛着を感じた。

きれいに蘇った福井の海に自信と誇りを持って、これからも私達が住む漁村に後継者を育てていきたい。

５．今後の課題

以上、私達は「住みたくなる漁村づくり」を目指し、取組んだ活動を発表させていただいた。

海辺の学校にさえプールができている現在、海に親しむことが少なくなり、とても残念に思っている。だから、なおさらのこと私達が子供と海を結ぶパイプ役となりたいと思う。今回の漁業体験学習活動は、船内の見学、説明、釣り、釣った魚の料理、アンケートだけに終わってしまったので、次回は事前研修（漁業について学習会をもつ）と事後研修（反省会等）を持ち、より充実した漁業体験学習活動としたい。

今後は、青壮年部と婦人部との交流、他団体・グループとの交流、消費者ニーズにあった魚の加工・販売、ＰＴＡ・地域と連携し体験学習に広がりを持つ、高齢化社会に対応できる健康で安全で美味しい魚の提供など、課題はたくさんある。それには常に婦人部員がアンテナを高くして情報をキャッチし、それを実行に移せるよう、全部員が常に協力する体制づくりが今後の課題であると考える。